

完了報告書（平成 23 年度）

提出者 本田 恭子

提出年月日 2012 年 3 月 31 日

【プロジェクト名】

和文 地域資源管理に対する新住民の意識と参加傾向

英文 New Residents' Consciousness of and Participation in the Regional Resources Maintenances

【メンバー構成】

研究代表者 本田恭子

幹事

メンバー

【ねらいと目的】（600 字程度）

本研究の目的は、農業用水路やため池に代表される農村の地域資源の共同管理が混住化の影響を受けてどのように再編されるかについて検討することである。申請者は昨年度まで混住化の進む兵庫県福崎町で調査を行い、新住民は地域資源の管理に形式上参加しているものの、彼らの参加の程度は集落ごとに異なることを明らかにした。しかし、昨年度までの研究では、農家や自治組織の代表者に対する聞き取り調査が中心であったため、地域資源の共同管理への協力を求められる当事者である新住民の認識を明らかにすることが出来なかった。また、「新住民」と一口に言っても、彼らの移住時期や移住の経緯、自治組織との関わりの相違に応じて、地域資源やその共同管理に対する意識は多様であると考えられる。そこで、今年度は非農家や新住民側への調査を通して、彼らの地域資源の管理に対する参加条件を検討することを課題とした。

兵庫県福崎町 16 集落より各 1～2 人の新住民に対して聞き取り調査を実施した。質問項目は新住民の移住時期や移住の経緯、地域資源に対する意識、農業用排水路の維持管理作業への参加理由や参加の程度である。

【活動の記録】

研究会・ワークショップの場合は、開催年月日、報告者と報告題等

調査の場合は、調査年月日、調査者、調査地、調査目的等

その他の活動も含めて、研究期間中の活動について簡潔に記してください。

日本農業経済学会 2011 年度大会（開催年月日 6 月 11 日～12 日）

地域農林経済学会第 61 回大会（開催年月日 10 月 22 日～23 日）

日本村落研究学会第 59 回大会（開催年月日 10 月 28 日～30 日）

※以上の大会は参加のみ、報告なし

【成果の概要】 (800 字程度)

調査対象とした新住民 24 人は多様な居住経緯（例：旧住民との結婚、子供の教育のため、安い宅地の購入）を持ち、実家が農家である住民も非農家である住民も存在する。また、調査対象とした新住民は既存の隣保（以下、「旧隣保」とする）に住む住民と人口増加に伴い新たに設けられた隣保（以下、「新隣保」とする）に住む住民に区分できる。しかし、居住経緯や出自、隣保に関係なく、新住民は用水や水路・ため池について「汚い」「危険」といった否定的な評価を行ったり、新住民には関わりのないものと評価したりする傾向があった。よって、新住民の地域資源に対する認識は資源の状況に依存するところが多く、居住の経緯や出自、所属隣保がこれに与える影響は小さいと考えられる。

一方、水路の維持管理作業への参加理由は、非農家の所属隣保や居住の経緯で 3 つに区分することが出来た。子供の頃に転入した新住民の中には、作業への参加を住民間の交流の一環ととらえ、「楽しみ」と積極的に評価する者がいた。一方、旧隣保に所属する新住民は、作業への参加を「つきあい」と評するなど住民間の交流の一環と認識するものの、そのことを積極的に評価しない傾向が見られた。そして、新隣保に所属する新住民の多くは作業への参加が「つきあい」や交流の機会であるという話を明確に否定し、「生活排水を流している」、「家が近い」など、自身と直接関わりがあることを参加理由とすることが多かった。このような参加理由の相違は、集落住民との関係の深さや住民との関係構築の必要性によるものと考えられる。子供の頃から集落に居住してきた新住民は旧住民との間に深い関係を既に築いているからこそ、作業への参加を積極的に評価することが出来ていると考えられる。しかし旧隣保の新住民はこうした関係が未だ構築されていない状態ながら、生活の必要に迫られて旧住民と交際をしているために、「つきあい」という表現を用いたと考えられる。そして、新隣保の新住民は旧住民と交際する必要がほとんどなく、また新住民同士も相対的に交流への意欲が低いことから、作業への参加は交流の一環ではないと認識していると考えられる。

【通信欄】

(研究代表者記入)

プロジェクト	■次世代 □次世代ユニット □男女共同参画に資する調査研究	
経費	予算額 200(千円)	実績額 199,931 円